

1951年、僕の生まれ年、鎌倉市に日本初の公立近代美術館が開館した。神奈川県立近代美術館（通称鎌近）である。

30代半ば頃、友人が鎌近

に会わせたい人がいると言うので、一緒に出かけた。

H氏を紹介され親しく話をした後、他の学芸員の人たちなども加わって夜の町に繰り出し、大いに盛り上がったのだった。

今思つと、その後の美術

シーンを牽引することになる人ばかりである。しかるべき特有の気風を持つ鎌近は、展覧会の質の高さとともに人材の宝庫でもあったのだ。この日の出会いは、僕にとってかけがえのないものとなってゆく。

前置きが長くなった。その鎌近に初めて行ったのがエドワルド・ムンク展。1

970年、東京で暮らし始めた年のことである。初の大々的なムンクの紹介で、会場はあふれんばかりの人。そこで不覚にも涙を流してしまったのだ。

僕は若く、その前面に出ているドラマ性に触発されたのだろう。たしかに感情移入しやすい絵ではある。しかし、皮膚感覚からだけ

絵と涙

ではなく、ムンク自身、際どいところから衝き動かさ

れ描かずにいらなかったものが、僕の深層に食い込んできたのだと思いたい。

もう一度は40歳の頃であったか？東京の草月会館にブラリと入った。セザンヌ

の絵があった。卓上のパンと食器を描いた小さな作品。つづまやかな日常を描

いた灰色っぽい絵。その前は僕は動けなくなり、気付くと涙で霞んでいた。不思議な涙であった。

外に出て歩きながら、なぜか満ち足りたうれしさが込み上げてきた。やがて気持ち治まり思った。一見何でもない絵に揺り動かさ



れたのは、この作品の持つ

力、精髓に触れたのではないかと。セザンヌが絵と格闘してきたものを、確と受け止めた気がしたのだ。

絵の前で涙が出る。これはいったい何なのだろう。一般に音楽や映画、小説などで涙しても、絵の前では

あまりない気がする。この差はどこから来るのか。音映像、言葉は動いてゆく。そこで人々は1時間でも2時間でも流れの中に浸ることがができる。しかし1点の絵の前で30分も見続ける人は珍しい。

絵は静止している。たとえ絵が訴えていることがあるにしても、一枚の平面に留まり動かない。それでも揺さぶられるとすれば、受けるだけではなく、こちらから絵に向かって動き始めているのかもしれない。

僕の個展会場のこと。入って来た知らない女性がある作品の前で立ち尽くし、無表情にハラリと涙を零したのを見た。僕は会場

で自分から声を掛けることはしないので、なぜだったのかは知るよしもない。

(吉田 淳治・画家)